

久米っ子だより

2024年9月12日 第10号

<http://www.kuwana-c.ed.jp/kume-e/>



令和6年度全国学力・学習状況調査の結果から

4月に6年生を対象として実施された「全国学力・学習状況調査」の結果がこの夏に出ましたのでお知らせします。実施教科は国語と算数です。久米小学校は国語・算数とも平均正答率が、国および三重県の平均を下回りました。国語は僅差でしたが、算数はちょっと気になる差が出ました。

今回の対象は6年生でしたが、「学校の課題」として捉え、全職員で「強みと弱み」を共有し、課題改善の具体的な方策をもって今後の授業に活かしていきたいと思えます。

以下に今回の結果についての概要をお知らせします。

【国語】

一定の成果として認められる内容

- 知識・技能（言葉の特徴や使い方に関する事項）
 - ・学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる
- 思考・判断・表現（話すこと・聞くこと）
 - ・目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる
- 思考・判断・表現（書くこと）
 - ・目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすることができる

<考察>

学年別漢字配当表に示されている漢字、文中での漢字の問題について、2問中1問は多くの児童が正答できていた。また、目的や意図に応じて集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを考え、その先の伝え合う内容にまで思いをはせることができていた。

上記のことは、これまで基礎学力の定着に意図して取り組んできた成果が表れていると考える。これまでの学習において（～6年）、文章の読み取りを、資料を含めて丁寧にを行い、段落ごとに内容の整理を行ってきたこと、その過程でのペア学習やグルーptークで児童自身が理解・納得しながら授業に取り組んできたこと、そして新出漢字の学習についても丁寧に取り組み、繰り返し書き取りを行ったことで定着が図られたことの成果だと言える。

課題として考えられる内容

S-P表からも学校全体として「重点的に指導すべきだと考えられる問題」

- 知識・技能（言葉の特徴や使い方に関する事項）
 - ・話し言葉と書き言葉との違いに気づくことができる
- 知識・技能（我が国の言語文化に関する事項）
 - ・日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気づくことができる
- 思考・判断・表現（書くこと）
 - ・目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き

表し方を工夫することができる

○思考・判断・表現（読むこと）

- ・人物像を具体的に想像することができる
- ・人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる

<考察>

「思考力、判断力、表現力等」の「書くこと」「読むこと」に大きな弱みが見られた。「情報の扱い方に関する事項」で高い正答率を出した以上に「書くこと」「読むこと」で大きく正答率を下げている。条件付き作文は毎度おなじみの問題だが、今回も複数の条件を満たして作文することを要求された。多くの児童がすべての条件を満たして作文することができなくて誤答となった。具体的には、「主語」を誰にして作文するのかの読み取りが曖昧で、登場人物と「自分」が混乱している作文になったこと、また、今回は作文の問題が2問あり、2問とも作文の条件に「資料から言葉や文を抜粋すること」が条件になっていたのだが、うまく抜粋することができなかったことが誤答につながった。また、書いても自分の気づきだけで作文している解答も多く見られた。「作文時の条件」を理解しないまま文を書き始めたり、どんな答え方をすればいいのか見通しを持たずに なんとなく答えてしまったりしていたのではないかと推察する。

授業において、「作文時にどんな情報が必要なのか」「何をどう問われているのか」といったことを確認するような場面の設定が必要である。ワークシートの活用や、ペア・グループ学習での「対話」活動の場で上記の課題が解決していけるよう授業改善を行う必要がある。

【算数】

一定の成果として認められる内容

○知識・技能（数と計算）

- ・数量の関係を、□を用いた式に表すことができる

○知識・技能（図形）

- ・直方体の見取り図について理解し、かくことができる

○知識・技能（データの活用）

- ・円グラフの特徴を理解し、割合を読み取ることができる

<考察>

条件を理解した上での□を用いた立式や、直方体の見取り図を理解し途中までかかれた図の続きをかくこと、円グラフから特定のデータの割合を読み取ることについては多くの児童が正答できた。他の問題についても基礎的・基本的な問題はある程度できている。（図形、変化と関係等）

上記のことは、子どもたちの「学びの姿勢」が意欲的であることに加え、授業において「何を求められているのか」をまず理解し、答えを導くために必要な道筋をイメージしてからグラフや表を見たり、立式していくという課題に向き合う姿勢（授業スタイル）ができていること、そして、ペア学習やグループトークでの議論によって子どもたちが理解と納得を繰り返しながら学びを深めることができることなどの成果だと思われる。

課題として考えられる内容

S-P表からも学校全体として「重点的に指導すべきだと考えられる問題」

○知識・技能（数と計算）

- ・問題場面の数量の関係を捉え、式に表すことができる

・除数が小数である場合の除法の計算をすることができる

○思考・判断・表現（図形）

・球の直径の長さや立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができる

○思考・判断・表現（変化と関係）

・道のりが等しい場合の速さについて、時間を元に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる

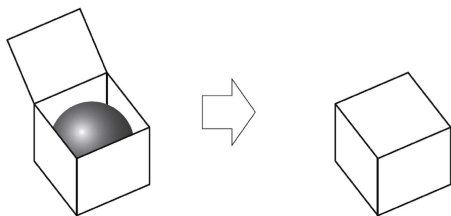
<考察>

算数については「知識・技能」においても「思考・判断・表現」においても課題が見られた。特に気になったのは以下の3点。

①除数が小数である場合の除法の計算

「 $540 \div 0.6$ をしましょう」という問題について、3割強の児童が「90」と解答した。単純に「 $540 \div 6$ 」の計算をしたのかは定かでないが、そもそも除数が1以下の小数の場合「商は割られる数より大きくなる」という既習内容が定着できていなかったのではないかと推察される。

②球の直径の長さや立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表す

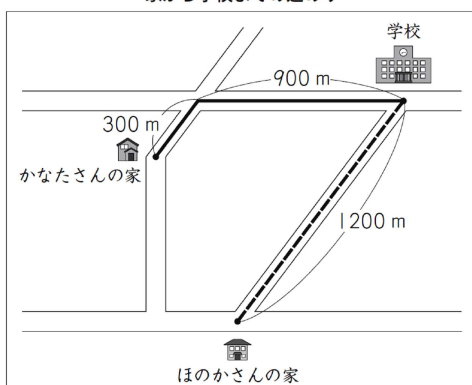


直径22cmの球が左図のように立方体の箱に入っているときの立方体の体積を求める式を書きなさいという問題。正解は「 $22 \times 22 \times 22$ 」。正答者は4割ほどで大部分は「 22×3.14 」または無解答だった。立方体の体積の求め方の理解と、左図の場合、球の直径が立方体

の一辺に等しいことが想像できなかつたと思われる。正方形にぴったり円が収まっている場合の、正方形の面積を求める問題の復習からこの問題にもう一度取り組みたい。

③道のりが等しい場合の速さについて、時間を元に判断しその理由を言葉や数を用いて記述する

かなたさんとほのかさんが、それぞれ家から学校まで歩いて行ったとき、かなたさんは20分、ほのかさんは24分かかった。2人の「速さ」を比べ、どちらが速いかを選び、そのわけを言葉や数字を使って書くという問題。正答者は2割に満たなかった。全国的にも正答率は低い問題ではあるが、記述部分が気になった。単純に、「かかった時間」がかなたさんの方が短いので、多くの児童が「かなたさん」を選ぶことはできた。しかし、次の2点のいずれかの記述ができた児童が2割に満たなかった。



かなたさん
家から学校までの道のり

学校

900 m

300 m

かなたさんの家

1200 m

ほのかさんの家

i) 2人の歩いた道のりは等しいのにかかった時間はかなたさんの方が短いのでかなたさんの方が速い

ii) 2人の「速さ」を計算で求めたら、

かなた： $1200 \div 20 = 60$ 分速60m ほのか： $1200 \div 24 = 50$ 分速50m だからかなたさんの方が速い

「速さ」の捉えが曖昧であることから、改めて言葉で表現するとなると戸惑ってしまったのだろうと思われる。「速さ」「道のり」「時間」の関係性について、再度授業で取り扱っていく必要がある。

「正答に必要な情報は全て問題文や図表に示されている」ということを再度確認し、まずは「冷静に問題と向き合うこと」、そして「何が求められているのか」「どう求めるのか」「解答に必要な情報はどれか」といったことをイメージしてから解答に取りかかる習慣を身につけさせられるよう、授業改善を行っていく必要がある。

【児童質問紙（生活・学習状況）】

よいところ（「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答した割合が高いもの）

- ・携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っている 84.6%
- ・自分には、よいところがあると思う 89.7%
- ・先生は、自分のよいところを認めてくれていると思う 97.5%
- ・学校に行くのは楽しいと思う 94.7%
- ・いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う 100%
- ・人の役に立つ人間になりたいと思う 100%
- ・友達関係に満足している 100%
- ・分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている 81.4%
- ・地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う 92.3%
- ・タブレットなどの機器について、自分のペースで、すぐに調べ、画像や音声の活用で理解し、自分の考えや意見を伝え、友達との共有や比較をしつつ、共同学習ができている 90%以上
- ・学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている 94.9%
- ・先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思う 92.3%
- ・授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる 92.3%
- ・学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいる 87.2%



気になるところ

- ・朝食を毎日食べている あまりor全く食べていない 15.4%
- ・毎日、同じくらいの時刻に寝ている あまりor全くしていない 28.2%
- ・平日に1日当たりどれくらいの時間、ゲームをしているか
4時間以上：23.1% 3～4時間：10.3% 2～3時間：23.1% ※2時間以上：56.5%
- ・平日に1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などをするか（学習やゲームをする時間を除く）
4時間以上：20.5% 3～4時間：5.1% 2～3時間：15.4% ※2時間以上：41%
- ・将来の夢や目標を持っている どちらかといえば当てはまらないor当てはまらない：30.7%
- ・困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる
どちらかといえば当てはまらないor当てはまらない 30.7%
- ・自分と違う意見について考えるのは楽しいと思う 当てはまる：12.8%

児童質問紙では、日常の生活の様子や、他者との関わり、学習に対する考え方等について答えてもらいました。「自分にはよいところがあり、教員にも認められている。学校は楽しいし、友達関係にも満足している」と多くの児童が答えています。また、学習活動に対しても前向きな姿勢も見られます。

一方で、多くの児童が「携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っている」と答えていますが、平日のゲームに費やす時間やSNS・動画視聴に費やす時間が、県や国と比べてもかなり時間が長いことがわかりました。（ゲーム＋SNS・動画で1日で4時間以上費やす児童が半数近くいると思われます）また、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」という問いに対して3割の子どもが「どちらかといえば当てはまらない・当てはまらない」と答えました。学校に行くのは楽しいと思いつつも、「困りごとや不安などを相談できる大人が学校にいない」と考えている児童が少なからずいるということは看過できません。教科担任制の利も活かしながら子どもたちの状況把握に努め、職員から「大丈夫?」「困ってない?」などの声かけをしていくよう確認しました。

【今後の取り組み】（すでに取り組んでいることも含んでいます）

- ・「誰一人取りこぼさない」ことを常に意識し、きめ細やかな対応に心がけます
- ・子どもたちが達成感や自己肯定感、自己有用感を感じられるような学級・学校運営に心がけます。
- ・授業では学びの見通しを持つために「学びのゴール」を明らかにします。
- ・「何を学んだのか」「どう学んだのか」「その学びは自分のこれからにどう生きていくのか」といった「学びの自覚」ができるよう「振り返り」活動を行います。
- ・自他の考えを尊重し、ともに認め合える雰囲気醸成に努めます
- ・ペア学習やグループでの「対話活動」を通して学びが深められるよう、授業を工夫します。
- ・問題に取り組むときは「何を求めるのか」「答えを出すために必要な情報は何か」「出した答えは何を意味するのか」「これからどう役立つのか」といったことの確認を丁寧に行います。
- ・教科担任制のメリットを最大限活かし、子どもたちが安心して学べる環境づくりを進めるとともに、教科の系統性を意識できる授業改善を行います。
- ・読書に親しめるようソフト・ハード面の整備を進めます。
- ・語彙力を高められるよう、自分の意見を発信する方法を柔軟に選択しつつ、子どもたち同士のコミュニケーションに活かします。
- ・個別最適な学びができるよう、ICT機器の活用および自由進度学習を進めます。
- ・「3つの言葉がけ」に家庭や地域とも連携して取り組み、子どもたちの「自己決定の場」を多く設定することで、様々な活動を「自分ごと」にできるよう努めます。
- ・読書ウィークの取り組みを継続していきます。
- ・国内外を問わず、現在の社会状況について、子どもの発達段階に合わせて話題にしていきます。

☆保護者の皆様へ☆

今回の調査は、調査対象児童の学力の全てが把握できるものではありません。また、調査結果を成績表に反映させることもありません。ただ、学力に関して「この調査」でわかってきた「強み」と「弱み」は「全校児童について同様のことが言える」という認識の元、分析結果や今後の授業改善に向けての具体的な取り組みを職員で確認と共有をしました。保護者の皆様におかれましては、日常の家庭生活において、先にお示した「課題として考えられる内容」に関わって、子どもの興味・関心を大事にしながら、お家でできることに取り組んでいただけたらと思います。例えば

- 会話を単語でのやりとりで済ますのではなく、文章で会話をするようにする。
- 新聞記事やネットニュースを話題にして、考えたことについて会話をする。
- 「勘違いしてるかも？」と思われる発言があったときに、ただそれを正すのではなく、勘違いに自分で気づけるよう会話を工夫する。
- 新聞やチラシ、パンフレットなどからわかることを話し合う機会をつくる。
- 家庭生活の中で、子どもに自己決定させる機会をつくる。
- 「本物のよさ」を体験できる活動をさせる。
- 宿題を「している」か「していない」かの確認ではなく、宿題の内容を確認し、困っていれば適切なアドバイスをします。



※お忙しい毎日だとは思いますが、できる範囲で取り組んでいただけるとありがたいです。

【個人的な感想】

全国学力・学習状況調査の結果を個人ごとに、あるいは設問ごとに考察していくだけでは十分ではありません。S-P表(※)を詳しく見てみると、誤答であっても実は「当該児童にとって正答が比較的容易だったと考えられる問題」の割合がけっこう高いことがわかります。要するに「問題をよく読まなかった」「こういう問題だと思い込んでいた(勘違いしていた)」といったミスによる誤答が少なからずあったのではないかと推測されます。こういうミスはもったいないです。また、正答率が低い問題の中でも重点的に指導すべき問題の傾向についても明らかになりました。単純に「知識」だけの問題ではなく、設問にいかにか正対しているかが大切だと思います。設問について「何が問われているのか」「どんなことに留意して解答しなければならないのか」といったことの丁寧な確認が、どの学年においても必要だと考えます。上記について職員全員で確認し、授業において改善できるよう努めています。お家の方のご協力もどうぞお願いします。

※S-P表：「全国学力・学習状況調査の結果を、学級単位で、縦と横がそれぞれ児童生徒(S:Student)と設問(P:Problem)の正答数の多い順に並べ替えた表の中に、S曲線とP曲線を書き入れたものであり、これを活用することにより、平均正答率だけでは把握できない、学級全体の課題の傾向や、個々の児童生徒が理解していない可能性が高い設問を見つけ出すことができる」というものです。

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/28/1409621_1.pdf



↑S-P表解説